WASON
HQ
1104
J74+

Apr. 7
1888
no 104

廿一年四月(版權所有)七日發兌

THE WOMAN'S MAGAZINE.

女學雜誌

東京女學雜誌社

一冊五錢（府内無税 郵税一錢）毎土曜出版

第百四號

社説
理想の佳人(第一)
心中の畫像

論説
女權伸張の方向(田口卯吉)小供の精神及保護法(桝叔)

叢話
言文一致の大忘知○獨逸小説の沿革(久松定弘)○女學校の賄ひさわぎ○山吹嬢

小説
都鳥○小説神髄

佳傳
メレー、ガルトン

寄書
山内孺人行實(川上源吉)

小供の話
尤も尊ふとき所行○狐と盗人

新報
福岡てる子○女學校の音學會文學會其外二十件

詳和堂中川昇刻　專賣二〇三一一一五

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 104, April 7th, 1888.

EDITORIAL:— The Ideal Belle: No. I. The Ideal, a Mental Picture.

LEADING ARTICLES:—Where is the Most Urgent Call for Advocacy ?, by Mr. U. Taguchi; The Child's Brain and How to Protect it, by Prof. S. Sakaki.

MISCELLANIES:— An Important Step Toward Combining the Written, and the Spoken Language : History of Novels in German, by Dr. S. Hisamatsu ; The Board of Female School.

BIOGRAPHIES:— Merry Anne Galton.

NOVELS : — "Miyakodori": Bouquet of Novels.

CHILDREN'S COLUMN:— A Noble Deed of All ; A Robber and a Fox.

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

前號(第百三號)目次

●社說　女學校々長の涙

●論說　告別之演說(植村正久)○日本婦人之地位(伴直之助)

●批評　歌舞音樂略史

●叢話　婦人と禁酒(阿部磯雄)○美術談(美術解及美術學校の繪畵)○百人一首一口話(鈴木弘恭)○古の男女風俗(佐々木小鈴)○行平

●小說　都鳥○小說神髓

●佳傳　ハーリエット、チエル

●寄書　湘烟女史の詩○一致女學校生徒歌文

●小供のはなし　尤も尊とき所行

●新報　公論新報に答○女子の唱歌○鹿兒島縣と娼妓○美術の雜誌其の外二十三件

●珊瑚の珠　(第六十回)

掬水月在手　　六如居士

嬛娜仙姫倚書欄。滿身風露不知寒。王纖弄水金鈿涇。要捧姮娥對面看。

代閨人答輕薄少年　　唐　崔顥

妾家近隔鳳凰池。粉壁紗窗楊柳垂。本期漢代金吾婿。誤嫁長安遊俠兒。兒家夫婿多輕薄。借客探丸重然諾。手明挾彈入新豐。日晩揮鞭出長樂。青絲白馬冶遊園。能便行人駐馬看。自矜陌上繁華盛。不念閨中花鳥闌。花間陌上春將晩。走馬鬪雞猶未返。三時出望無消息。一去那行近遠。桃李花開覆井欄。朱樓落日卷簾看。愁來欲奏相思曲。抱得秦箏不忍彈。

わつまより京への道にて　　おと

山かくす春のかすみぞうらめしきいつれ都のさかひなる闗

小倉山　　定家

忍れんものともなしに小倉山のきはの松そなれて久しき

家を移すとき　　周防内侍

住わびてこれさへ軒の忍ぶ草しのふかた〳〵多きやどかな

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第百四號

明治二十一年四月七日發兌

社説

○理想之佳人

（第一）。心中の書像、

秦朝の魔鏡を執つて、政事家の胸を照らすに、云はく東洋政略、云く征韓論、云く保安條例と、雜多種々の希望計畫、陰然として、先づ既でに成れるを見る。更らに之を執つて、學者の頭惱を照らすに、云く共和國、云く進化論、云く憲法草案と、雜多異様の議論、考説、陰然として亦既に成れるを見る。又更らに之を轉じて、書生社會の腹中を照らすに、云く總理大臣、云く小學校教師、云くナポーレオンと、雜多さま〳〵の念願、目途、明白に、既に早くより成立ち居るを見る。則ち、又、密かに佳人心裏の奥を照すに、云く石山寺の秋の月、云くチーレアンス城外の劒、云く長生殿上夜半の約と。雜多無限の、恨思歎望、優温として夙に定まれるを見る」大凡そ、如此きものは、即はち皆な其理想なり、理想先づ心中に成つて、而して後發して行爲言語と爲る。左れば、理想は猶ほ人の心の書像の如し、或は尤も愉快なるものあり、或は尤も悲むべきものあり、或は宏大無邊なるもの、或は極微極小なるもの、賞むべきもの、卑しむべきもの、一見して殆んど欣慕に堪ゆべからざるもの、若しくは、醜汚下賤、復た再び之を見る可らざるものあり。此に於てか、此の書像、陰々然として人の口より出で、或は叙々焉として、人の行ひに現はれ、輙はち以て、此の人を愉快なるものとし、悲しむべきものとし、英雄とし、愚人とし、善者とし、小人とし、或は温厚の君子とし、下等なる野人とするあり。理想先づ内に成て、行爲言語、外に現はる、則はち、外に現るゝの言語行爲は、殆んど皆な其源を、心中の理想に歸するが故に、理想の愼しまざる可らざるや明白なり。

此故に、世人が流す所ろの、汗血、動かす所の、筋骨は、悉く是れ、其心中の書像を外界に展開せんが爲め也、其の願望の熱心なるものは、熱心に勉めて、汗血、瀧の如く流れ、願望の軟弱なるものは、亦た軟弱として、筋骨を勞するヿ少なし。英雄の事を爲すや、一斷決、復び動かず、自ら信ずるヿ泰山よりも重もし、百顛千挫、倒れて尚ほ止まざるものは、自から其心中の書像を見るヿ甚はだ明白にして、之を展開せんとするの熱心の、甚はだ強烈なるが故なり。而して、悲し

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

むべきは、彼の弱はきものゝ行爲なれ、心中漾々として、雲煙りの立去るとなく、畫像、隱見出沒して、確に之を認むる折少なし、則ハち、之を心外に現ハして、實際に、全幅を開き見んとするの熱心もなく、汎々として水上の浮草の如く、漂乎として風の儘に流れ、世の風潮にもまれ〳〵て、左右前後し、遂に一事をも爲さずして止む」之を以て、事の、成ると成らざると、人の志の、達すると否らざるとは、一ゞ是れ、其人個々の畫像の明白なると、之を開くの熱心不熱心なるに因る。以て、無形なる理想が、世上の實際に關係する、甚ハだ濃厚なるを知るべし。

左らば、獨逸聯邦の組立てられたるは、先づ、ビスマーク老人の心中に、其の理想ありたるに因る。征韓論の破れて、保安條例の物の見事に行われたるは、西郷翁の理想薄弱にして、伊藤總理大臣の賢明有力ありしに因る。試みに、米國合衆邦、自由の氣の雍々たる、其元因を何如にとせば、多く是れ、高祖ワシントンが、淸潔なる胸中に生れたる、理想の反射なるを見る、又試みに、四海基督敎國の兄弟能く相和し、無形的に、一種の美妙なる天國を組立る、其の元因の何なるやを問はゞ、即ハち是れ、敎祖基督が、至愛なる愛念中に結構されたる、天の王國の漸く出現するものたるを知る。而して、ワシントンは、之が爲に七十餘戰し、七星霜の苦戰を爲せり、基督ハ之が爲に、淚を流し玉へり、血を、水の如く灑ぎ玉へり、遂に十字架上に萬民の爲に全身を犧牲ゞ爲し玉へり、如此き高潔の理想あり、之を行ふに如此き非常の熱心あり、左らば、世と共に自由國の隆んとならんと、天國の彌ゞ廣まりて、萬邦を其足臺とするに至らんと、固より因果當然の數なり。故に、理想先づ確立し、實行の熱心次に隆んならば、必裏陰々の畫像、輙ち悉く立現はる。其内外前后に相關するの密切なるや、毫も之を疑ふべからず。

此の故に、準繩を以て人を正し、規矩を以て之を直し、只だ外面に於て、之が正直に、聖善にあらんとを要するは、殆んど其の効を見ず。凡そ、人をして正直に聖善にあらしめんと欲せば、先づ、其心中の理想を聖善正直の地に立たしめざるべからず、理想既に斯の如くならば、其の發するや、喩へば水の下きゞ就が如し、好し之を放任すると雖ども、知らず知らずして、其れ自身に望まるゝの所に至らん、亦心配を要せず。此故に、人の正しからざるに至つて之を歎ずるは、抑も末なり、先づ、其心中に理想の組立られたるとき、其正しか

らざるを見るの日に於て、之を歎ぜよ。又其組立られたる理想の實行せられんとき、其勇氣の不熱心なるを見るの日に於て、先づ、之を歎ぜよ。苟くも之を始めにし、之を其の心に於てし、之を其の理想に於てして、先づ其正しからんを要めば、後に至りて言語行爲の、發して自からに正しからんと、明白也」之を以て、吾人は、常に、其始めを愼しむ、其の未だ木の下影に隱れ、苔むす岩ほの下に密み、沈々、默々として、人の心裏の理想境内に存するとき、此の時に於て、其の希望念願の、尤も淸潔に、尤も正善ならんことを望む、彼の新聞紙上の慈善、輿論公議中の正論は、是れ固より可なりと雖ども、其發する所の根、若し眞とに心裏の理想に植らるゝにあらずんば、此の慈善も、正論も、朝たの露と共に消ゆるの時あり、果敢なくして固より賴むべきにあらず。故に吾人は、今ま假ひ、最と小さき樫の實にてもあれ、最と微かなる芥子種にてもあれ、後に發して亭々森々たる大木と爲り、多くの鳥を捿ますべき喬木となり、以て數百千年につゞかん程のものゝ種子を、得んと望む。嗚呼、理想なる哉、理想なる哉、吾人は尤も理想を尊とむもの也。

理想内に成て、行爲外に現る、外に現るゝの行爲は、其の性質、度數を、先づ、其内なる理想の爲に支配せらると云ふ歟。左らば、吾人は、女學上の事業を爲さんと欲するに當つて、先づ、其事業に對する吾人の理想何如なるかを、省みざる可らず。女子敎育の、甘く行はるゝも、衰ろふるも、女權伸張の、隆んとなるも爲らざるも、皆な是れ、當路者が心中の理想何如ん、及よび、之を實行するの熱心何如に關す。左らば、明治文明の日本人、即ち、新時代の新日本人が理想する所の、佳人は果して何如樣の佳人なりや。

吳王、劒客を好めば、百性に瘢瘡多く、楚王、細腰を好めば、宮中餓死多し、アイノの女、唇に入れ墨するも、踏舞舘の貴婦人、洋蜂の腰となるも、漢王天下の父母の娘、悉く楊家の女たらんと欲し、京中の白拍子、我も我もと、妓女たらんとを羨むが如き、皆是れ、外に要むる所の者あつて、内に、之に應ずるものあり。即ち、一般に理想せられたる佳人の品格、茲に一定して、天下の婦女即はち斯の如き佳人たらんとを理想し、天下の士人斯の如き佳人を得んことを理想し、理想、理想を追ふて、畫像の人物、躍然として活動す、此に於てか、無形裏に造られたる新粧の佳人は、終に笑つて、當代の楊妃光姫と爲る也。

むかし、毛利元就、嚴島に詣うづ、從者後へに在つて連りに拜禱せり、元就之に問ふて云く、汝曹吾が爲に何をか祈る、從者云はく、君が國主たらんことを祈ると、元就の曰く、汝曹、何の故に吾が天下の主たることを祈らざる、天下を望んで而して後ち一方を得べし、先づ一方を望むものも、尙ほ一國をだも得るに足らずと」と。蓋し人事の希望は、大抵半途以外に達せず、蜀を望の人は、隴を得て亦た得る所なきを常ねとす。左らば、人々個々の理想は、彌が上にも大に、大なるが上にも大にして、初めて其幾分を得べし。之を達せんとするの熱心は、彌が上にも強く、強きが上にも更らに強くして、初めて其幾分の望を達すべきか。然れども、新日本人民が、新粧の佳人を要するの需要は、隨分に強し、故に、此上は、只だ、何如なる佳人か是れ、彼等の爲に理想せらるゝ、其の理想せらるゝ佳人の善惡、何如と念掛するのみにて、最早其外の心配を爲すには及ばざる也。

論說

○女權伸張の方向

田口卯吉述　社員筆記

左は東京北部婦人矯風會の演說會(本郷敎會堂)に於て演述せられたるものゝ筆記なり。

貴女紳士諸君、私は今日諸君の前で演說せよと云ふ御依賴を受けました誠に私の身に取りて榮譽で御座ります然しながら諸君も御存しの如く私は是迄婦人のことに付ては更に考を持ちて居りません平生職として居る所は全く我國の婦人の事と緣の離れて居ることで不斷心を注いで居ります所も婦人の有樣を如何にすべしと云ふことに付ては更に氣を注めて居りません或は友人中に其等のことに付きて熱心して居るものがありますならば自分の力の及ぶだけはそれを助けることは致しますが何う云ふ風にするが善いと云ふことに付ては更に議論のないものであります故に曾て此會より演說を御依賴になりしことがありましたがその時に固く御斷りを致しました然るに此度は是非出ろと云ふことでした之れも餘程御斷りをしましたがなんでもかでも顏だけでも出せと云ふことでありましたから顏を出す譯で此に登りました。

偖て然らば私は諸君に向ひて何を申しませうか諸君に向ひて道德のことを申し上げませうか私は諸君に申します程の道德を持つて居りません諸君は日曜日每に尊き說敎を御聞きになることでありますから殊更に私が述るに及ばないと考へます然

らば諸君に向ひて智識上の御話を致しませうか或は歴史なり或は文學なり或は技藝なり其等の事で諸君に向ひて述べようかと云ふこに此一場で智識上の演説をするのは少小無理と思ひます殊に私の智識は先づ經濟とか歴史とか云ふこに付いて少々講究したに止まるこでありますが此御話は誠に今日此處に於て述ぶるこに縁の薄いものと考へますついては如何なるこを述べ樣かと考へましたが隨分婦人ばかりでなく世の中の熱心家と云ふ者は迷ひの説があり其中に道理の合はないこが多くありますから其れを一言述べて聊か諸君の御耳を汚したいと思ひます。

其事は今日頻りに婦人方の會に於て女權伸張と云ふ議論が盛んになりて居ります此女權伸張と云ふこは一時社會の問題となつてより實に盛なるものでありますが其意味は何う云ふ風のものかと云ふこを講究しなければなりません私は一躰其字義は正しき字義でないと云ふ考であります之れは隨分あるこであります衛生に熱心の者は頻りに衛生のこに付いて議論をし世の中に適さない度までに議論を進むるものであります宗敎道德の上でも同樣のこで總て感情に訴へ道理に適はない度までに走るものでありますが唯一方に偏した議論では人間社會の幸福を全ふするこは出來ないと思ひます故に私は女權に付いて諸君に御話しいたします。抑も女權伸張即ち男子が婦人の權利を壓して居るから之を取戻さねばならぬと云ふ議論が世の中に盛んでありますが然しながら男子が婦人の權利を壓して居ると云ふのは日本社會の如何なる男子が壓して居るか如何なる種類の良人が壓して居るかと云ふ其事實を確かめて辨論しなければならぬこであります。日本の總ての良人は總べての婦人を壓して居りますか、奴隷の如くにして居りますかと云ふ、問ひを以て來たらば決して壓して居らんと云ふ答をしなければなりますまい日本に於て幾萬の夫婦がありますか知りませんが此の夫婦が斯の如く和睦して居るのを見れば其良人は婦人を壓して居るのではなく夫婦和合して居るのである總ての男子が婦人を壓して居ると云ふ攻撃を男子に向ふて加ふるのは少しく間違つて居りはしませんか一躰何ういふ所の點で男子が婦人を壓して居ると云ふでありますか、今ま之を下等社會に求むるに此下等社會中には私の見渡した處では男子が婦人を壓して居ると云ふこは言ひ難いと思ひます殊に此の社會の婦人は中々強いものにて罷り違へば男子も閉口する程であります私は此の社會の夫婦は和睦して居るこは

云ひません然しながら互に粗暴なる言語を用ひたり或は腕力に訴へたりしたとて直に不和だと云ふとは出來ません何ぜなれば其の交際の方法が左樣なるとあればなり殊に男子が婦人を壓して居る奴隸の如くに使つて居ると云ふ言葉を用るとは決して出來ませんと思ます、然らば少しく上に登りて中等社會に尋ぬるに此社會に於ては或は壓制するもののないとは云はれませんが然しながら奴隸の如く使ふと云ふ言葉は中等社會の夫婦の間に用ふべき者でない成程一切の家事を引受けて水仕事或は臺所の事をするのは賤いと申せば賤いが之が爲に男子が婦人を奴隸使すると思ひては違つて居ります又婦人が働くに男子は少しも働かずして見て居るものもありますが之を以て奴隸使すると云ふとは出來ません一躰夫婦相寄て家を立てるからには臺所の水仕事や何にやかは誰れがするかと云ふ問題を起さなければなりません必ず一家を立てる以上は食事もしなければなりません又洗濯もしなければなりません又種々の事務も引受けて夫婦の間でしなければなりません此事務は誰が引き受くべきものですかこれは歐羅巴の如き社會は違います總て歐羅巴の社會は萬事整のつて居りますから日本の如く賤くない、洗濯をするには其職業があり臺所の事にしても井から水を酌むと云ふ樣な酌み方でなく栓を引けば出ると云ふ樣になつて居る又竈にしても日本の如くでなく品位を保ち賤しくなく働くとが出來る其れと日本の社會とは比較は出來ぬ日本では之れに反して水仕事をするも臺所の事をするも萬事に勞が掛りて細君たる所の品位を汚すとは汚すけれどもこれをすればとて其れで女子の權利を害したとは云はれません故に斯う云ふ點を以て日本の男子は女子を奴隸使すると云ふ文字を用ひ或は此點で女子の權利を回復しなければならんと云ふ樣な議論は適當の議論ではありません然しながら私の考へでは更に一步を進めた社會に至りますと婦人に權利がないと思ふ即ち上等社會であります此社會の婦人は全く家の内に置かれて何もせぬ一つの品物である床の間の置物の樣であります私は此の如き婦人は實に憐れなる者と思ひます是等の婦人は一躰臺所のとを仕やうと思つても爲し得ない水仕事を仕やうと思ても爲し得ないこれを爲すにはちやんと家來所謂る奴隸が付て居ります(此塲合でこそ奴隸であります)此奴隸が付いて居りますから此人は内に座つて計り居り書物を見る位の人はエライ人にて多くは見ないと思ひます斯う云ふ婦人に權利のないのは當然の事であります神は決して如此き何

事もしない婦人に權利を與へますまい去れば我國種々の社會に就いて考へ見れば彼の上等社會の婦人こそ憐はれむべき者で奴隷の如く尤も權利がなく家の内に閉込められて居りますが其外の者は男子と同等の地位に立て居ります歐米の婦人が夜會などに立つときは男子と同等で其時儀をする時は婦人を先にする位だから大層權がある樣でありますが之れは表向の敬禮で内實は婦人には餘り權利はないそうです私は歐羅巴のことは能く知りませんが事實に就きて考へて見ても男が外の事も爲し又た臺所の事もすると云ふ事は出來る譯がない人力車に乘りて外に行く時に坂などがありますれば良人が下るが之れは女が弱いからであります斯う云ふことは日本にも幾らもありります併し家のことは婦人が引受けて遣ると云ふことは當然のことであります近頃歐羅巴の婦人も女權論を主張し男子に向つて權利を取戾し婦人も撰擧權を得なければならん國會に出なければならんと云ふそうですが私はそんな事は婦人方に於て勝手になさい男子に於てはそんな事に搆つて居れぬと云います爾かのみならず是迄の歷史上に付いて考ふるに日本と云ふ國は婦人の權利が强かつた樣に思はれます外國の歷史上に現れた事實と比較して見れば日本の婦人は餘程勢力を持つて居りました婦人の强よいと云ふ事實がある其の强よいのは何かと云ふに戰に出て鬪つたと云ふ事です此の事は日本の歷史に一番多いと思います私は支那の歷史に付いて見ましたが支那の婦人は憐れむべきものであります支那には種々の戰があつて慘酷に人を殺したと云ふことは多いが婦人が何う云ふ風に戰つと云ふことは見えないと申しても宜しい支那戰國より秦漢三國等には種々の戰があつたが其際婦人が現れて戰たと云ふことはない唯だ〱逃げるのと虜になるとの二つである歐羅巴には彼の「ジヤンデ、アーク」と云ふ樣な女豪傑はあつたが一般の婦人が戰たと云ふことは御座りません樣です日本に於ては彼の源平の比巴御前などが出て非常の力を現はし又其後板額などと云ふ强よい女が戰に出て鬪たと云ふことは澤山あります其上に日本には女の持つ武器がある則ち薙刀であります初めは男も用ひたと見え中納言知盛も武藏坊辨慶も持つて居りました其以後は婦人の持つ武器となりました何しろ婦人の持つ武器のある以上は其れを以て戰たに違いありません又馬に騎ると云ふことも昔の婦人にありました彼の曾我十郎が大磯の虎に贈物を遣つたことがある之れは何かと云ふに馬であつた自分の騎て居た馬を贈物として與へたる虎は其馬に騎て十郎の母親の

所に行たと云ことがあります、して見れば軍に出ない女でも馬に乘ると云ふことがあつたに相違ありません其れから後醍醐帝中興の以後は世の中が亂れて種々の戰がありました落城の時婦人が落延びる有樣を見るに馬に乘つて薙刀を持つて男子と戰たと云樣でありますこれは小說などにも書いてありますが事實に於ても有つたことと思ひます其れから又德川氏にありましても婦人が武術を嗜んだと云ふことは幾らも例があります其著名なることは武者修業の爲に諸國を廻る者があつて或る師匠の許にて修業して居る時其師匠が娘に婿を取ると云ふ話がありて其娘も腕に覺のあるものゆゑ仕合をして其武術に勝たものを婿にすると云ふ樣なことがありました此例を以て見れば我國に於ける婦人の氣性と云ふものは今日はイザ知らず以前に於ては隨分强かつた者と思ひます斯く婦人の力を現はしたる事に付ては種々の事情があるに違ひないが日本の封建社會は支那西洋の封建社會と違ひて土地も狹く逃げることも出來ないから所謂窮鼠却つて猫を噛むと云ふ譯で婦人も戰はなければならない有樣であつたかも知れません然し其本人たる婦人の氣性が强くない以上は斯く日本の歷史に現はれる譯はあるまい私は或る外國人に聞きましたが日本人は愛國心に富で居る故萬一の時には國の爲めに戰ふ者は男子ばかりでなく婦人も戰ふであらうと云ひました其言葉は能く當つて居ると思ひます日本の人は日本の國を自分の者とし我奉ずる所の政府は自分の政府として內相鬩ぐ如きことあるも一朝外國と戰ふ如きに至つては必ず一致して戰ふと思ひます而して戰ふものは獨り男子のみでない婦人も必ず古の如く助太刀に出懸るでせう斯く强い婦人の事なれば今日と雖も決して男子に壓せられて居る譯がない今日の有樣は婦人諸君の滿足せねばならぬ所と思ひます。

然しながら私は婦人の權力を見るばかりでなく又婦人の弊害をも見なければならんと思ひます何うも是は亞細亞の風習で御座りますが國を弱めたと云ふことは婦人に向ひて言はねばならんと思ひます勿論政府の組織が悪いからで御座りますが其政府の弱かつたと云ふことも婦人が之を誘導したものであります彼の平家の大將淸盛等の起つた時分の勢は隨分强かつたが遂に西海の波に沈む樣になつたこともそれから鎌倉の衰へたことも後醍醐帝の中興の甘く行かなかつたと又た德川政府の弱くなりたことも色々な源因はありますが婦人の爲に社會が腐敗したと云ふことは事實に於て明かであります勿論政府の組織の

悪いには違いないが何うも其間に立つて先づ腐敗の分子を引受けたものは婦人であると思ひます然しながら此の如く禍を為した婦人は如何なる者かと云ふに最初に述べた最後の婦人則ち上等社會の婦人と云はなければなりません下等社會のものでもなし又た中等社會の者でもなく上等社會の婦人臺所の水仕事も仕ないで唯床の間の置物になつて居る樣な者が政府の腐敗を招いたものであります然れば我國の婦人に向つて私が希望する所は一己獨立の婦人となれよかし勇ましき婦人となれよかし眞正の婦人となれよかし則ち彼の上等婦人となる勿れと云ふことであります人生婦人の身となる勿れ百年の苦樂他人に依るとは白樂天の述べた語でありますが是れ則ち彼の上等婦人のことであります上等の地位に上たと思ふのは間違にて一の男子に玩弄物となり擒にされたと云ふことでありますす若し婦人にして上等の地位に上るも此の如く悪くなるまいと思つても迚も其風習には敵すべからざることにて必ず其れと同じ結果を來す者でありますから婦人の戒むべきことは人間社會の上に立つことであります忘れても彼の上等婦人の如くならんことを希望してはなりません因て此一言を諸君に呈しました。

○小兒の精神及び保護法（其三）

榊俶述　佃與二郎筆記

三歳位にもなりますれば色々の遊びが出升女の御子さんなれば其時分に一番歡ぶのが奇麗の衣服や人形です奇麗の着物が欲しひ人形が欲しひと云ふ情は世界中皆同じことでありますから某學者は說を為して赤子の中から女の子と云ふものは子供を持たなければならぬ性質の者であるなどと申します今人形と球とあれば女の子は人形を取り男の子は球を取り升詰り是れは天性であります三歳以上にもなつて遊びの初めは泥とねでありますが外に出れば自分の持て居る玩弄物は棄てゝ直に砂をかき集めて羽子板なり何なりを援けに取て泥を集め升日本の小供も獨逸の小供も其邊は同じことです庭樣の者を拵へたり山を積だり壞したり大きうしたり小さうしたり色々の形を拵へる後には形だけで面白くなくなると薔薇を植るとか杉の葉を植るとかして十分の運動をも致しますそれ故に何國にても耕作と云ふことは樂みて作るのと食物に作るのとありますが詰り開化も爰に基するので野蠻人民が進み行くと何も異る所はありません扨て此事はさき升して次に覺ゆるのが音樂です「チンチコヨー」とか申しますと大層に歡びませう勢ひの宜し

い歌を唱へば小供が踊り出します併し日本の歌は兎角寢い歌ばかりですが西洋のは大層勢が宜しく御座り升ッレ故自然活潑になり運動にもなり升又小供は歌ばかりでなく音樂をも好み升ヤア一寸日本の小供衆も太神樂が來れば跟を追ふて歡び門附が來ればペン／＼が來たからとて飛出します併し文句の巧拙に感ずるのではなくして音調を愛ずる一般の心から出るのですから成べくは活潑なる音勇氣ある歌を聞かせる樣に注意しなければありません。

又御子樣方に固有の性質があります即ち一人で遊ぶとが出きません初めは一人でも遊んで居りませうが友達が欲しくなつて自ら求めるに至り升が是れは人間社會で一己立つとの出きぬと云ふ一つの證據になつて居り升ツコデお友達が出きれば其仲よく互に遊んで居時是れは何ですと云ふのが初めてです「是れは何ですみーちやん是れなに」と終始問答をして居り升是れは日本ばかりでは無く獨逸でも其通りで私の下宿屋に居りました小供はオンケル／＼叔父さん／＼と云ひヷスイストダス／＼是れは何ですと云ふて始終タズチ升た年が長じますと負吝みが次第に強くありますから聞て見樣と云ふとも聞かずに仕舞ますが小供は然うでありません是れは何と聞てから次の問は何にするのかと其働きを問ひます母君此紙は何うしたのか何處から持て來たのか買たのか貰つたのかと理解しないうちは何時までも問て居ります肩につかまつて質つくどく聞きますから母君は迷惑ですから知らない顏をして居るのがあり升が此小供の問と云ふは實に一生懸命なので敎へぬと云ふは不慈悲の至りであり升是れが先づ小兒精神發育の道行きて御座い升。（未完）

叢話

○言文一致上の大忘却（句切の點を打つ事）

言文一致と申し、口に述ぶる言葉と、筆に書現はす文章とを、一致せしむる事は、近年に至り、學者仲間にて大層の議論と爲りました。之は至極尤もなる考へて、成るべく辨説が直ちに文章と爲り。文章が直樣、耳に聞取れるように、爲りたいとて、左樣相成らば、今の如き徒らに六かしひ、文章は流行らず、又た言葉附も自然に奇麗に爲つて、自づから雄辨の術も進歩するとならん。夫故へ、吾人は到底は言文の一致と爲らんとを望み、差當りの處ろは、或る限りまで成るべく之を一致にするように致し、追て雙方を磨きに磨いて、扨て辨説の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○やまぶきの娘　是空子

軒は荒れ、戸は破れ、安んじて膝を容るべき居間もあらず、日暮れては坐ながらにして星を眺め、雨降る夕べは片すみにひそみて、漏る滴りを打ながむ。

朝夕の三度の食、四季おり〳〵の更衣の節、身貧にして變わりなければ、一年の長き一日に異ならず、一日の間だ一時に違へず、差したる望みなければ、樂しみもなく、僅かに天をながめて、打吟ずるに過ぎず。

一天にわかにくもり、雨しのをついて降り來る、雨の足高けれども、走る人の音はきこえず、乍まち聞こゆ、人馬の聲、原頭の驟雨、雨具を持ず、少さか吾に貸し玉へと、彼は富んで貧を知らず、軒のやまぶき實の一だになきを、一語無限、無限の世、此一語を以て終りける。

速記したるものが名文と爲り、名文を朗讀すれば、堂々たる雄辨と爲るように致したいと、常々に念願いたす。

扨て此の言文一致を行ふに當り、いろ〳〵の心得方があり、今の學者もさま〳〵と說を立てらるゝとなるが、玆に甚だ手近い事があつて、而も尤も大切なる、其効能は直接に分かる、一つの法方をバ、多分は忘却して居られハせぬかと、考へられます。即ハち文章に點を打つと是れなり。

先づ人の談しを聞くに、語ばに緩急があり、程好き所ろに途切れがあつて、則ハち其意味も、語勢も分かるとであります。然るに之を文字に寫したるとき、たとひ、速記法にて、寸分たがハずに寫したれバとて、若しや、語ばにて聞くときの樣に、其の續きに、緩急斷續の區別がなくば、何如に言ばを有の儘に寫したりとも、其の演者の思ひは通ぜざるべし、然らば是れ、外面の言文は一致したりとも、其の大切なる精神に於ては、既でに互ひに相違するところあつて、即ハち異日言文の一致に大勝利を得さするとが、出來ざらうと考へらる。故に言文一致を尤も容易に、尤も手早く、實行する一つの良工夫は、文章に點を打つて、棒よみに成らないように、用心するとにあるべし。

然るに此の點を打つと云ふとは、珍らしくないとて、既でに多くの人が實行して居る、決して忘却しては居らんと、言はるゝ人もあるとあらんが、夫は僅かに一二人で、多くの言文一致論者には、まだ玆に申す所ろの意味は瞭解せられて居らんように、思ひます。成程、和學者が點を打つように、反譯者が點を打つように、句切り、もしくは、文字つゞきの混じ易い所ろに、點を打つとは既に行われて居る、然し之を口にて辨ずる時の調子に合ハせ、語勢に緩急斷續あるの次第に隨つて、點を打つとは、未だ多く行われないように、見受けます。西洋にはコンマ、セミコロン、コロン、などと言ふ句切りの記號があつて、其記號の處ろに至れば、記號の何如に隨つて、或は長く、或は短く、語勢を止めて辨說にて言現ハす時の趣きに致します。然し之れも、吾人が言ふ所ろの精神をバ、十分に現ハしたる法方とは思ハれませぬ。

要するに、言文一致を欲するものゝ文章は、其文章に點を打つべし、點の打ち方は、人々の話しの仕方、人々の勝手な緩急を度として、自由〳〵に打つを善しとす、決して一定の規則を設く可らず。グツ〳〵したる人は、自から句切が長くならん、勢急の人は短くならん、突然として斷ち、なが〳〵と

續くる如き、皆な其の當人の氣性を現はすに至つて、初めて言文一致の精神が行われ、尤も面白き文章が出來ませう。

○獨逸小說の沿革　久松定弘

左は社友石橋君近著の小說の爲に久松氏が書き贈くられたるものと云へり

捨小舟序

獨逸小說の沿革は獨國文藝の進步と極めて密接の關係あるをもて悉く之を明かにせんことは固より一小冊の能くすべき所にあらずと云へとも其大躰の變遷を略述するは亦敢て難き業にもあらざるべし玆に聊か其大略を擧けんに抑々今の所謂る小說は其初め古來の傳說及ひ英雄豪傑の偉蹟等に基き作り設たるものに濫觴したるは世の人のよく知る所なり古への小說は皆韻文をもて綴りたりしが十四世紀及ひ十五世紀の頃より何人にも解し易からしめんため散文もて綴ることと大に世よ行はれ「トリスタン。ウンド。イヅルデ」(Tristan und Isolde)の傳說のごときも散文にて物したるものありき一千五百八十五年の頃「フランクフルト」地の書賈に「フォイエルアーベンド」といふ者あり其頃、人々の愛讀したる小說及び法朗西より輸入したる人情小說を編纂してこれに題して「ロマン」(Roman)といえりこれ小說を「ロマンと」稱するの權輿とは知られたり抑々「ロマン」といふ語の淵源を尋ぬるに學士社會の說所區々にして于今尙一定せず其一說よこの語の起原は中古日耳曼の蠻民西羅馬の版圖を侵略したるときにありて全く羅馬語の「ローマ」と云ふ語の轉訛したるものなりと這は信を置くに足の說たらんと思はる又この語を小說てふ意義に用ひたる由來につきても學士の說く所一ならず或は亞剌比亞人が西班牙に移住したるときにありともいひ或は法朗西の「ブリタニー」地に始るともいひ或は諾耳曼人に始れりともいひて孰か眞なるや今日まて其定說を耳にせずといへども兎に角此語は耶蘇敎傳播の後に用らるゝに至りたるの事實は紛ふべくもあらず因にいふ此語の沿革は英國の學士ダンロップ氏(Dunlop.)の物したる小說史に詳なり。

又此頃伊多利國に一種の小說躰出てゝ世に行はれたり此躰は巷說街談其他日常の瑣事を種子とおし當時の人情を描寫するを旨とせるものにて「ノヴェルレ」と稱するは即ち此躰なりとす此躰の小說にて世に名たゝるは伊國「ボッカチオ」氏の筆になれるものにいと多しと聞けり。氏の著作は十五六世紀のころ專ら歐洲におこなはれ諸國の學者競ふて其著作を翻譯し獨

逸にては間もあらずして譯書の種類二十有餘に及しといふ。十八世紀の頃より政治小說(Der politische Roman)といふもの頗る流行したりこの小說は法朗西王路易第十四世の御宇に始まりしものにて外交內政等すべて政事上に關することを種子として作れるものありしが一千七百二十年の頃よりこの躰漸く衰へ「ロービン、ゾナーデ」(Robinsonad)といふ一躰出てゝ盛に行れたり此躰は「ロービンゾー。クルゾー」と題する小說を以て濫觴とす此小說は英國の學士「ダニール。デ。フオー」(Daniel de Foe)の物したる一種異躰のものあるが當時大に世人の愛讀する所となり一千七百二十年の頃には獨逸においても或はこれを翻譯し或はこれに倣ふて小說を著作するもの極めて多く一千七百二十二年より同五十五年の頃となりては「ロービンソン」と題する書四十餘種に及ひしと云ふ此小說躰の流行したるは獨逸のみにはあらで歐洲諸國におこなはれたるものと見え獨逸朗賓孫を始とし伊多利朗賓孫。索孫朗賓孫。法朗西朗賓孫。其他宗敎朗賓孫。道義朗賓孫。醫學朗賓孫。政學朗賓孫等數ふるに遑あらざる程なりき爾後十八世紀の末、十九世紀の初にいたりてはこの小說躰も漸く衰へ人情小說(Der empfindsame Roman)と稱するもの始めて世に流行るゝにいたれりこの躰には種々の別ありて詳かに其區別をなすこと難しといへども獨逸の文章家「ゴッチヤール」氏の說によれば大別して二となすを得べし卽ち(Historischer Roman.)(即ち歷史上の事蹟に基きて演義するもの)(Der Leitroman.)(即ち現時の風俗人情を直寫するもの)これなり其歷史上の事蹟に基く小說は英の「スコット」氏獨逸の「ローヘンスタイン」氏の著作の如きものにて我國曲亭翁が弓張月、俠客傳これに類す又現時の人情風俗を基としたるものには其種類いと多くして一々例を擧るは煩はしければ玆に其重あるものを示さんに三種あり其一は(Salonroman)(即ち我國の柳亭種彥が田舍源氏の類これに似たり)其二は(Volksroman.)(即ち我國の式亭三馬が浮世風呂、浮世床の類これに近し)其三は(Burgerlicher Familienroman)(即ち式亭小三馬が女房氣質、大晦日曙草紙の類これに近し)といふ此躰は當今獨逸國に於て盛ゝ流行するものなり。

上に述べたるは獨逸小說の沿革一斑に過ざるも亦聊か彼の國小說の變遷を知るに足りぬべし倘其詳かなるを知らんと思ふ人は獨逸大家の小說沿革史を繙かば思半に過ぎん。

"All true trophies of the ages Are from Mother-love impearled: For the hand that rocks the Cradle Is the hand that rules the world."

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○女學校の賄ひ騒ぎ

凡そ學校の生徒と賄ひ方ほど仲の惡るき者はあらじ彼等は抑も何如なる因縁ありて其樣には睦ましからぬぞ賄ひは云く何如に書生なればとて少こしは物に遠慮が有り相な者よ何もそう無暗に澤庵をお茶に漬けなくとも左樣お香々をツユの中へ入れなくとも宜しからずや御飯を食べさして殘したりお菜を無味いと云つて膳の下へ覆したり猫の生れ代りならずは洋犬の同類ならん彼のような亂暴をされては彌よ／＼お菜を扣へ目にして殘させないようにするに如かずと賄部屋の評議まち／＼なり。書生は授業のいとま／＼寄宿舍の片すみに大會議を開らき一人慷慨悲憤して演ずるやうは何樣もあんな賄ひは速やかに退治せねば成らぬ其の御飯の燒きようの下手なるや或はお粥の如く或ひは强飯の如し其のお菜のまづきや蓋し吾々をハキダメ視し人力車夫視するにあらずんば出來ざるの料理なり諸君われ／＼は貴重なる目的を有して日夜に腦力を使ふものなり那のような物を食はされては迚も生命が繼くまいと存ず月三圓の金でアンナものより食べさすることが出來ないとあらば賄ひが下手なである若し下手でないと云へば自から利益を貪ぼるのである此の二者必らず其一ありと信じて幹事に訴ふるに幹事知らぬ顔して吾々を搆はぬとは彌よ棄置かれんとでは御座らぬか吾々はもはや致し方なし吾々に御馳走を與へよ然らずば死を與へよと云へる今日に於て最早／＼遲疑すべきにあらず之れより斷行の處置を行わねば成らぬと思ひ候、演じ了りて贊成々々の聲四方に高し即はち書生枚を含んで夕御膳の席に近づき數十人言ひ合はせて無理に二杯づゝ余計の御飯を食べ香々の切り方が惡るいと稱して取て投げ棄て賄ひ／＼代りを持て、賄ひ／＼御ハチが空だ、賄ひ／＼コリャ御ハチが空だぞ、云く香々、云く飯、或は罵り或は騒ぐ賄ひは天に舞ひ地に踊り頭までポッポ／＼と煙を立てゝ之を謝するものあり竈に火を燒きつけてセッ／＼と追焼するものあり香々の糠みそ香ひ善からず棄てたるお菜落花の狼籍たるが如し、斯の如くにして追燒も出來鳴りも鎭まり賄部屋ホット息氣をついで今日の苦戰に勞れ果て先づ善かりしと云つて安眠す、時に不思議や合圖の礫を投ずるものあり暫らくして小石はつし／＼として亂下す賄ひあわてゝ駈け出づれば石飛び來つて頭まに當る逃れて部屋に入れは伏兵ドットおめき出でゝ又た頭まを擊つ、蓋し夕方の大食に腹が脹れ運動を兼ねての夜ぜめなりしと云ふ。

吾人も嘗ては學校の書生なりき臆病なれども膽一つ弱はしと雖ども腕一本正さかゝ賄征伐に加黨徒せざるとも出來ず之に馳せ參じて隨分の手柄を現はしたるともある也、因て熟ら考ふるに書生にも無理はなし賄ひ方も亦た憫れむべきものなり蓋し書生の學問するや三度の食物の外は何の樂しみもなし然るに此の食物が甘まからざるときは天下に最早一物も心を慰さむるものなし元來物價の高下は知らず料理の鹽梅の如何んをも辨ぜず只だ確かなるは食物の味はひなしと云へるとにあれば則はち前後の差別もなく一揆徒黨の謀反を目論見ゝ至る强ちに其理なきにあらず、然るに賄ひ方も亦た可愛相なり學校の燒き出しにて藏を建てたるものもなければ書生への賄ひは左程の利益あるものにあらず然るに出來もせぬ無理の注文を言ひかけてチヲンの萎込み塲に會席の馳走を要め日十錢の金で西洋料理を食べんとす迚も爲得べき事にあらず土曜日曜のもうけあれども月俸を拂はざる書生も少なからず差引して多くの利益もあらざるに之をしも倘ほ遣ひ拂はせんとす之れ吾々を驅つて無價の奉公をせしむるものと云ふ、雙方の苦情ともに理あるが故に苦情いつ迄も斷へず未來永劫此の兩方は和睦すべからざるか密かに歎息の至に堪へず。

此は是れ男子の學校に於ての事にて女學校に於ては左樣の暴く々しき處行ある可らず何さま書生とは云へ元と是れ優雅貞温を專ばらとする孃方にてあれば賄ひ征伐などのあらんようなし然れども其の勘定高き性質は反つて彼等が優情を亂だし中には之れが三圓の賄ひですかと密かに語り合ふて無限の怨みを洩らさるゝ者なきにあらず左れば好し男學校に於けるほどの騒動はなくとも亦た是れ怨み骨髓に徹する陰微沈靜の不和ありては宜しからず願はくは其のサハギの未だ起らざるに先だちて早く其豫防法のあれかしと考へ居りたる處ろ吾人の尤も親近せる某女學校の幹事は左の寄書を送られたり、

弊校にて家政科を實試し先づ食物料理の一部を相試み候ところ未だ一ヶ月丈けの經驗には候へども余程の好都合に付其の規則概略を寫し此儀御報道申候

第一條、此科は入塾生のみの修むべきものと可致事

第二條、塾生は兼て定め置く順番に順ひ賄部長及取締補と協議の上日々塾生の食物を料理いたすべき事但し賄部には校婢數人有之部長は晝夜之を監督いたし居候に付右塾生は只だ部長等と協議の上日々の献立、校婢の使ひ風、經濟の出入、月々の損益等に注意して專ら家政の大脉を見習ふに止まり別段自から手を下して料理等致さるゝに及不申事

第三條、右兼て定置く順番の義は豫め幹事より指圖いたし一回十人と定め其の修業は二ケ月と限り毎月其半數づゝ交代致すとに取極め全塾生代る〳〵相濟し
以上は復び以前の順番に返り可申事

第四條、右修業中の塾生は毎月末に至り決算書を製して幹事に差出さるべく其他の細則は一切其組中の協議に任ず但其議定の趣は必らず一々幹事に申し置かるべき事

此の方法眞によろし而して實試の上其効能ありしと云ふか左らば是れ實に一擧兩得（騒動鎭撫・家政稽古）の良法也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○百人一首一口話（四）

鈴木弘恭講
八木彌二記

山部赤人

田子の浦よ打出てみれば白たへのふじの高ねに雪はふりつゝ

此の歌は萬葉集に。山部赤人望不盡山歌一首幷短歌とあるその短歌なり。新古今集にも出てありますが。萬葉には田子の浦にうち出てみれば眞白にぞふじの高嶺に雪はふりける。とありて此所と少し意が變りますが。たくさんは變りません○田子の浦は駿河の國の地名〻○うち出てのうちは。添言と云て意なし。うち見るうち聞くなぞいふうちと同じことであります○白たへのは。白栲の如くといふ意にて。此のはのごとくのといふのであります○一首の意は。田子の浦の所へ出て見るがマアソコデ白い栲の如く眞白にふじの山の頂きに雪がふりつゝ奇麗なことであるとなり。かやうに素直に。やすらかに詠のが歌の正格でありましてにて。後世の人の及ばぬ所であります。語格は。一段切れの歌にて。雪はといふはが指辭にて。ふりつゝといふつゝにて結べる格であります。

"If I had read as many books as other men, I should have been as ignorant as they are." Hobbes.

小説

○都鳥

第二回　塒失ふ親なし鳥（上）

石橋忍月

冬の夜の月は老女の粧ひてふ譬へも凄き阿武隈川、入江の柳春待ちて眉毛作れど彌寒き風の手櫛にすきかへし、白粉ならず置霜の色もきらめく汀の岩打寄す浪も氷いて氷柱に下る計なり

年の頃は十六七娟容人に勝れ屋敷育ちの高髷も、いとかき亂れ上田太織棒縞の上着も葡萄色縮緬の羽織も、袖も裾も泥に塗れ、顔青ざめ唇、色を失ひ愁の目元に前後を見返り〳〵素足のまゝいきせき迯げ來る一人の乙女漸く人道にたどりつきホット一吐息。見渡せば人目も草も枯果てゝ殘るも淋しき岸の蘆、風に戰いてゴー〳〵と流に響く恐怖の景狀聞ふるもの觸るゝもの總て乙女の心膽を寒からしめざるはなし跡よりうろ〳〵二人の荒暴男「ヤア玆に去居ッた」と近寄る姿見るよりも乙女はビックリ又一散に馳出すをひッ捕へ

男、ヲイ姉さん乘迯するたァ太エ人だ。福島から此の寒い夜中に挽いて來て、今更無賃にされてたまるものかステン所で見込ンだ鳥モウ斯うなッちや蛇に蛙、動が出來ねエと

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

諦めて提カバンの中の五拾圓早く渡してしまいなせエ。チイ勘太手前少し手傳ねエか、ナニ可愛さうだ、可愛、嬉しいは跡の事だ先づ此カバンから

アレー泥棒、アレー

と泣き呼ぶにも頓着せず、とう／＼手提カバンを奪ひ取り

サア勘太是から手前にも七十五日生延させる、アノ柳樹の下に負擔ていけ

お金は差上けますから何卒御慈悲に、モウ免して、助けて、アレー、アレー、助けて、

寒夜の雪風を侵し福島の街を指して走りくる一輛の人車、高帽子に襟毛の附たチーフルを身に纏ふたる立派の紳士只事ならぬ女の泣聲聞つけて、車の上より

紳士　チイ車屋、アレ何ンだらう、チイ震えちやいけない、車が轉覆る

車夫　たしかに盜、盜賊でせう、此近邊を徘徊と聞た惡漢で…

折から又も彼方にて一層、烈しき叫び聲

アレー、助けて、アレー、アッ……

チイ車屋貴様も手傳ッて助けてやれ、ナニ恐い、憶病な奴だ、ツンナラ手前には頼まない、自己獨りで

と杖を携え柳の下に走り寄り突然後より大聲を發し

紳士　警察で探偵した盜賊ッコ動くな

と杖を以て乙女に寄り添ふたる惡漢の胴腹を力限り擊つ手を取ッて返して又勘太の腕を打つ、打たれて勘太はカバンを落す、すかさず紳士は之を拾ひ取る、二人は「警察」の一語に仰天周章逃げんとせしが敵手の只一人なるを侮り又も取ッて返し二人一同又カバン目掛けて挑み爭ふ。一人の惡漢終に紳士のステッキを奪ひ取り後に廻りカバンを握りたる紳士の左の手先を目掛け、力を極めて劇打つ、其いたさに堪え兼ねカバンを取り落すと同時に勘太が蹴る足先にコロ／＼と三四間向ふに飛ンで行く、紳士は既に押倒され殆ンど危き時又も聲を揚げ

ヤレ、忍びの巡査皆々立合なされ

の言葉に應して幸なるかな、有りがたやサット吹き來る川風に蘆の音ザワ／＼、惡漢二人は此物音を聞き又路上の人力と車夫とを認め其敵手の多きを誤察し取り戻されたカバンに目も掛けず下流指して雲霞と……

紳士は急ぎカバンを拾い取り、最前より驚愕と悲哀に狹まれて氣も魄も消え入りたる乙女の側に立寄ッて熟々見れば此片田舍には見慣れぬ都風、花の姿も仇嵐、吹き荒されし山櫻、匂

ひせぬこそいたわしけれ

紳士　モシお前さんモウ盜賊は逃てしまひました、サアモウ何にも恐い事はない

乙女は合掌拜伏一語なく只泣きはらしたる目元よりはら〳〵〳〵と數點の雫は蓋し悲涙、感涙、喜涙の混合なる可し

紳士　着物も何も泥だらけだ可愛さうに、一躰お前さんはドウして此難儀に

と抱き起して着物の塵を拂ふてやる

乙女　どなた樣かは存しませんが誠にお禮の申樣は………お蔭樣で命を……左もなくば妾は一生……

と又も涙にかき曇る

紳士　ソンな事は兎も角お前さんは是から何處へお出なさる旅人ですか但しは此土地のお方のお連はわりませんか

乙女　イヽエ、妾はけふ東京から獨りで出て參りまして夕刻に福島に着き、和名田まで參るので御坐いますが、モウ今夜は、とちらへも行かれません、何卒御悲慈に……此上のお願ひには、餘り不躾なとですが人里のある所まで……

わと差俯むいて言葉なし

紳士　ドウして〳〵和名田迄は三里餘りある所詮今夜は。私は今夜福島まで行くのだが、コウしてお難儀を助けたも何かの因緣、お前さんさへ否でなけりや、私の宿屋迄お連申しませう、そして和名田へ行くのは明日になさるが宜い、幸ひ車は二人乘りチイ車屋〳〵

車夫　ヘ、ヘイ旦那誠に恐う御坐いました、モウ來はしますまい子

紳士　馬鹿言へ、弱い野郎だ、是から二人乘るンだ、酒代やるから急いで挽け、モウ僅か半里足らずだ

車夫　ヘイ拜承ました、サア貴女もお乘ンなすッて(がら〳〵)

○小說神髓　(第一篇)

蘇格氏著ケ子ルヰルス　(第九回)

パー子ーは陛下の御前に出でゝ恐る〳〵申し上るよう抑も私し供の不埒を働らきたる元因の必竟主人に因ると申すわけは主人儀平生殊の外に物固くして邸內の規則なか〳〵に嚴重に候へば迚も下々にて不義を犯し候となど思ひも寄らぬことにて候ひしものを近來は何故よや顏青ざめて始終物を案じ万事ッツトりとして何事も手に着かざるよう也之は恐れ乍ら陛下にも御覽ぜらるゝところと存じ候左ればお邸內の締りも自らに緩み扨は私供までが不埒を働らき候餘地の出で來たるに付て

は事の起り必竟主人に在り之は固より主人の存じ居る所ろなりと申上たるは此處の意味にて候と云ふ陛下は思ひの外の事よと思はせ玉ひ乍ら申條の質朴なるに自づから打笑せ玉ふ。

パーチー重ねて申すようは主人近來の様子恐れ乍ら陛下の御目には着き申さず候や元と如何の故かは存ぜず候へども兼て御前にて戴かれたる包みを夜も晝も首よ掛け時には打吟じて愛歌ようの者を唱へ心臟形の黄金のかざり環に編みたる髪の毛一束を取出しては打泣き候おもむき只事とは存ぜられずと申す、陛下愕然として驚かせ玉ひつゝも又た龍顔よさとほどばしる御赤らみを制しつゝ扨ても汝ぢは細かに知れるものかな抑も其の編みたる髪の毛とは如何なる色合にや此邊りに似たる色あらば申して見よと御意あるにパーチーぎよろ〳〵と四方を見廻し最後に陛下の御つむりを見上げ乍ら只だ一つ似たるものゝ候へども恐れ多くして申上がたしと云ふに陛下特更らに怒る爲して其不敬を責め玉ひイツ〳〵として次の間に退けたる人々を召び玉へり。

陛下はレスター侯に向ひパーチーは最と細かき事まで侯の身の上を承知いたせバ能く用心して慎しまるべしと笑ひ乍らに仰せあり、侯は陛下に何事も隠くし參らすべき事候はずと答へらるゝに陛下は連りに喜ばし氣にて龍顏特の外に麗はしく彼のパーチーは不埒の者には候はんが性質正直のようにて特に忠義の心掛もあれば此度の處ろは許して遣はされよ朕之に代つて御わびを爲すべしとの御意あり、扨てトレッセリアンを召び出して之を見玉ふに風骨洒々姿采パーチーの比にはあらず斯る人を棄てゝ彼の如き不骨ものを擇むと云ふと女の情は淺墓なるものよなど案じさせ玉ひ乍ら之に向ひパーチーはラブサート嬢と最早正當の婚姻式を取行なひ候ひしよし左らば最早致し方なき儀に付老ひたる親許をも慰さめて善きに計らはれたしとあるにトレッセリアンの言ふよう彼等にして若し正當の婚姻を致せしとならば何事も訴ふる所ろ候はず然れど事の實際は大ひに之と相違いたすよ付きて恐れ乍ら御上をも煩はし候義と申し上るにパーチーは傍らよて打きゝ大に怒れる様を爲す、陛下は重ねてトレッセリアンに向ひ御身パーチーの申條を信ぜずともレスター侯の言葉は信ぜらるべし故に今改ためて侯に問はん彼は正當に婚姻せしものに候や如何に侯はハタト差しつまり陛下に僞はりを申すは不敬之に過たるとなし左らばとて今有の儘に申さんには逆鱗のほど如何ならん知りがたく吾が威權名望忽然として直ちに奪ひ去らるべし

と大ひに苦惱したるが言を曖昧にして「左れば先づ正當の婚姻を爲したる妻にて候」と申すトレッセリアン決して滿足せず左樣ならば何年何月に其式を行はれたりやと問ひ反すとき陛下は之を制し斯ても尙ほ滿足せられずとならば又重ねて調ぶるの日あるべし今日は先づ之にて宜しからんとて改ためてサッセックス、レスターの兩侯に向ひ今日恙がなく兩所の仲なほりの濟みたると何よりも喜ばし附ては近日ケ子ルヲルス城(レスター侯の邸)に會して喜びの祝會を開らくべし玆にはサッセックス侯も來り合はさるべし又たパーチーもトレッセリアンも會し特にパーチーは其の愛妻ラブサート夫人を伴ひ來るべしと命ぜられたるぞレスター侯に取りての苦心如何なりけん思ひ遣るだに憐れなり。

佳傳

○メリー、アン、ガルトン　Mary Anne Galton.

メリー、アン、ガルトンは今を去る凡そ百年の昔一千七百七十八年九月英國ボルミングハムに生れ一千八百五十六年八月眠る歳八十八父をサミユエル、ガルトンと云ひ富有なる商估なれども學術の研究に熱心なるをもて其名夙に聞こへ學士會員の一人たり母はルーシー、バックレーとて名ある富家の生れにて智あり德ある最と貴とむべき婦人なりき。

〔家庭の敎育及び幼時の有樣〕　年尙幼くして定りたる課業もなし難き頃にも母は尙其子を敎育するに油斷なく或時は數葉に切分ちたる地圖を出してこれを幷べしめ或時は歷史の大要を提みて一夜の物語となし又或る時は幻燈をもてマウント、ヘクラ。マウント、ベシビスの噴火エヂプトのピラミド。バビロンの公園支那の長城等を寫し出して天工人工の驚くべきことを示し苟且にも智識を開發することを務められしが父は又生物學の書類に付て禽獸草木の畵を示し其大躰を說敎へ豫て家に畜ふ鷄犬牛兎の足の爪を數へしめ專ら學理的の敎育を試みたり然ればストイック派(ゼノの哲學にて苦艱を忍ぶ派)にはあらねど亦苦艱を忍ぶ事を敎へたり或日齒醫者來りてメリーの齒を拔きしに少しも泣きもせで最と大丈夫げなりしかば醫者は大に感じサラば褒美を差上げんと云ひしにメリーは頭を振り否とよ彼スパルタの小兒が狐を殺せしとて褒美に預りしやと答へたりと云ふ(昔しスパルタと云ふ國あり此地の氣風中々勇々敷小兒を育つるに殊に荒々敷狐を捕へて袖の中に入れ聲を出さぬ樣殺すと抔を敎へたれば斯く云ひしなり)又

父は物事を敎ふるに必す其本源までを問究むることを敎へ光と云へば其本は大陽と敎へ水と云はゞ其原は海と訓したり或日メリーハ去れば其大陽と海は何所より來るなるかと自ら考へしも解し得ず尙篤と其日一日考へしに悟り得ず其母親に尋ねしに尙一日考へて見よとのみにて敎へられざれば又其翌日も考へしに遂に解り得ざれば其翌朝母は密室に連れ行きて此の問は實に生涯の幸福と不幸の別るゝ所にて又立命安心の關わる所なれば篤と覺へ居らるべしとて夫より神の事を說き初め其全能にして在まさゞることなく其智と其愛は限りなく至らざるなしと述べ聞かせ（神を說き敎ふるの一條殊に嚴壯なるを見るべし）夫より祈ることを敎へ每安息日に聖書の話を敎へ初めたり。

メリーが叔母にポリーと名づく最と信仰厚き人ありけり常に聖書の敎神の事杯話し聞かせたりしが或日叔母病に臥して將さに此世を去りなんとする際メリーは其側に至り叔母樣と共に行きたしと云ひしに叔母は最と嚴かに御前叔母の行く所に行きたしとなれば又この叔母が信ずるものを信ぜねばなりませぬと云ひし其一言は小兒心にだも深く銘せしと見へ或日隣の細工人人知れぬ骸骨を持ち來りてメリーに與へしにメリーは喜び日に僅かの金を貯へ一の箱を求め綿にて包み布にて卷き最と丁寧に箱の中へ入れサテ云ふやう「もし天國のあるならばもし此人の魂あらばもし此の人の友あらば吾が天國へ行きし時今顯はせし愛心を嘸や喜び玉ふべしと次で父母諸共へグレート、バール、ハウスに移り（凡七歲の頃）たりしが日に訪ひ來る客の中學者もあり智者もあり又宗敎家もありしが當時メリーは神の事に付き考へ居たる折からゆへ宗敎家の話ハ殊に利益ありて神に事ふるとと十字架の救をも知りたれば心中何となく樂しく常に獨歩遊散し秀たる山清き水枝頭に歌ふ鳥の聲谷間に笑ふ花の色見るもの聞くもの皆天地の至美を顯はして大神の榮光を示せば樂しきこと限りなく喜びて日を送りしに或日年若き友死りて柩を擔ひ行くを見て「ア、幸なる人かな吾等の只想像の中にのみ見る快樂を今や有の儘に享けんとは。

偖バールの家は廣大にして間取も充分都合よければ父母は下婢等の下等なる思想と其習慣を避けん爲め居間を分ちて下婢と交通の道を絶ち專ら智德の硏磨に心を用ひたり去ればメリーを始め他の小兒達も皆手々に花を摘み石を拾ひて樂しみ居しが中にもメリーは己が學びしラテンの單語をば頻りとマグ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ピー(鴉に似たる鳥の名)に教へ居たるを或時乳母其業を笑ひしに「吾は出來難き事を試む人の成せし所は吾も亦これを成さん」とロード、カサムは申したりと答へたり。（未完）

●寄書

○山內孺人行實。

柳外　川上源吉

孺人。諱登世。淸水氏。遠江。敷知郡。白羽村。惣作君之長女。年甫十七。歸岳翁山內君。以明治二十年九月三十日。下世。享年六十有二。生一男一女。男嗣家。即恒六君也。女配余。」(菊池三溪曰、恒六君、亦一世偉男子、其長女之賢、亦不讓孺人可知也、君家一門、孝子貞婦並出、可謂桃李聚君門、芝蘭生階庭矣、)孺人。爲人溫靜貞淑。能事舅姑。奉養具至。舅姑。嚴恪而節儉。孺人終始。不失其歡心。」其遇親戚故舊。推誠竭恩。(南摩羽峯曰、溫靜貞淑、及推誠竭恩、是一篇骨子、多少美事、皆自此八字生、)有老病數年。不能起居者。孺人迎之己家。而晝夜看護。嘗藥滌溺。未曾委他人。又有女幼而孤者。膝下鞠育。視猶所生。及長嫁之。又有離居數月而相見者。情話未畢。聲淚並下。其悃愊之情。不能自止也。」(羽峯曰、至誠惻々動人、)平素教其子女。慈而嚴。讀書裁縫之事。必擇良師而就學焉。而躬親督之。已長。則令寄食他家。而服其家事。以知勤苦處世之方。其意。蓋恐生長富家。染矜惰奢靡之風也。(又曰、極是美事、能得玉成之道、)子女或有過分之請托。乃諭以盈滿消長之理。且戒曰。汝今生奢心。異日冥罰。豈可不懼也哉。子女爲之悚然。反省而止。孺人視余不異所生。余罹篤疾。臥蓐數旬。衆醫束手。孺人深夜沐浴。以禱于神明。余之康强有今日。實孺人之賜也。嘗諭曰。汝少知文字。屈節而干仕則富貴或可庶幾也。(三溪曰、屈節干仕、富貴可求云々、予近日爲掛川松本氏、作冬靑舘記、亦此意、請一訪就而觀焉、)而余性疎狂。不能與俗俯仰。爲之憮然。今而欲乞其教則亡矣。悲夫。」(羽峯曰、悽然沾襟、)孺人敬事神明。尤信佛教。明因果應報之理。有高僧邃于禪理者。必就而問焉。(三溪曰、松下禪尼再生、)(又曰、高僧云々、後案伏線、)其訓子女。往々有得于禪理者焉。」性好施與。如雲水行脚僧。必布施齋飯及錢物而遣之。以爲常。或貧窶不能自活者。給錢穀賙之。年不知其幾十人。會有邑人老而販鬻營生者。每倍價買之。亦不問其物之用與不用也。」(又曰、有此一事、可以爲後世閨範、而況美事善行、不暇悉舉乎、)平生痛禁華奢。衣服飲食。皆親調理。其衣則。澣濯補綴而服之。其食則。粗飯菜羹晏如也。居常語人曰。多費金錢。以爲珍饍佳羹。美則美矣。然不如善調理粗菜。以爲美味之愈也。」孺人在其家也。和煦接人。凡有人。一言一行可嘉者。推稱不措。(羽峯曰、能成人之美、)而其躬行之美。則深秘而不出諸口。其率婢僕。毫無倨傲之態。一至誠能遇之。故皆欣々。樂爲其用。是以闔家雍々如坐春風中。(又曰、一團和氣使人感嘆不能已、)(三溪曰、內治之美至此有徵矣、)及其沒也。亡論識不識。無不嗟悼。會葬者。至數百千人之多矣。」

孺人夙悟生者必滅之理。於其親戚故舊。思紀念遺物之不可無。及齡超五旬也。自集衣片殘帛。剪綵補綴而製布囊。帖記其年月藏之。每歲一個。以豫爲之備。蓋其物雖微。手澤所存。且以日用不可缺之具也。（又曰、與前段就高僧問法、反映、文法周密、又曰、剃項入微、能叙不可叙之事、予亦爽然閣筆自失、）其平生用意之周密。概皆類此。」初岳翁山內君。服事商業。將有大起家聲。孺人亦夙興夜寐。勤儉治家。使岳翁無內顧之累焉（又曰、令岳翁無內顧累、所以爲賢婦人、又所以其家道盛、）終致家道豐優有今日。雖由于岳翁拮据經營之力。抑亦孺人內助之功也。嗚呼。余之於孺人。義以爲母子而其恩反有重於所生者焉。況於其溫靜貞淑實有足多者也。故今叙其平生行實。以示世之爲人母者。併報其恩萬一于地下云。　明治二十年三月日。柳外川上源吉謹述。

菊池三溪曰、　叙事明晰、能寫賢母平生、不遺餘力、如讀周南關雎之詩、山內氏閨範之美、可以想見也、

南摩羽峯曰、　周官曰、內宰以婦職之法教九御、六典曰、六儀掌教九御四德、今孺人之事、皆與之合、豈嘗讀書而有所得乎、抑其天賦之美暗合也、嗚呼、若孺人者宜爲女子師表也。

中村敬宇曰、　眞情溢于言外、孺人得之不朽矣、

"Honesty is undoubtedly the best policy; but he who abstrains from cheating merely because it is politic to curb his fraudulent inclinations, is really a dishonest man." 　Bowen

●新報

○女子獨立演說

新聞紙上にて福岡でる子女子獨立演說と題して大層に八釜しければ彼の中川雪江小島玉枝等の女史が厚生館萬八樓などに演說したるとは類の異なるものか何樣一應承知致したしと思ひて社員は演說あるの前日同子を訪へり最初箱崎町二丁目の鴻里方にありとの事を傳聞して同所に參れば或る差配人の樣に見受けたるが二三日前某々の所ろに轉じたりと云はる則はち其示しの如く蠣殼町一丁目四番地の石田氏方に行て見るにてる子早々に出迎はる散髮輕裝はなへだ重々しからず二階に案內せられて登り行くに幾十二机一脚さて洋行は何處への御目途と聞くに米國なりと答へらる米國は何處の御目途なりやと云ふに定まらずとの由尤も留學は十年にて追て歐洲大陸にも行くべし來月末に發航の見込同行者一人あり是迄少々彼地の樣子をも聞置たれば馬鹿にされる氣遣は無らんとなり、然らば大凡何を學ばるゝやと問へるに左して定りしとなし色々の事を味吟したしと答へ重ねて又た歐洲大陸へも參ると言はる、何分確たるお談しも出來ず其儘に歸りたるが翌一日井生村樓にての演說には傍聽者三百七八十名中には女子も見受けたるが先づ〳〵恙がなく濟みたり。

○女子教育獎勵會

同會の設立に係る東京女學館は彌よ近日より開館せらるべし此頃ろ英國よりカルタス夫人マクレー孃バル子ット孃パーカー孃ブリストウ孃ダンクレー孃の六女史外に夫人の下婢マクレヲド來着す彼地に於て夫々の好評もあり又教育も受たる方々なれば我國に於ては多く得がたきの女教師と云ふべし吾人は該館の文運尤も清潔に尤も隆盛ならんとを祈る。

○女學生の音樂會文學會

近來女學校追々と增加し女學生の數も亦甚はた增加したるが此等の諸子學校に在る間だは夫相應の樂しみなくては成らず之にはそれ〴〵の會合を設けて或ひは音樂の合奏文章の競作などを催されんてと眞とに清潔にして且つ樂しみある遊び事なるべし而して時々は親しき人々を招待して內端の客と爲し又折々には多くの外人をも招いて公けの集りを開らき平生其の嗜しむ所ろの藝もしくは多年間收めたる學を示されんとも亦た一つの慰さみなるべし左れば女學校に音樂會文學會などの設けあるは女學生の遊樂を正しきに導き其の鬱洩し易きの氣性を淸らかなる穴より蒸發せしむる一つの良方便と謂はる吾人は其の追々とさかむに行れんとを望むもの也。

○高等女學校の職員　文部書記官正七位能勢榮氏は東京高等女學校敎諭兼敎頭及幹事に同校幹事中村秋香氏は同校敎諭に去月三十一日任せられたり。

○東洋英和女學校生徒音樂會　去月廿九日午後八時より麻布の同校にて開かる式の大略は、

○フーガン（大河）○唱歌○ピアノ（種田、カクラン）○獨吟（ラドド）○ピアノ

(七穂)○ラーガン(今澤)○獨吟(ラーヂ)○唱歌○ピアノ(山尾、石井)○唱歌○ラーガン(平岩)○獨吟(ラーヂ)○ピアノ(吉田)○唱歌○獨吟(ランド)○ピアノ(長谷川、カクラン)

此内吉田孃の曲は(ザ、ミル)六かしき者を見事に奏し了られ今澤孃のは(メロデー)曲こそ難くなけれ其の手の中アッパレ堂み ありと聞ねぬ其外はラーヂ氏のザラール、ランド孃のラー、ホエア、イス、ヘーブンの獨吟双美双絕と許されて尤も面白かりき、來客七八十名にて后ちに茶菓の饗應ありぬ。

○櫻井女學校文學會　去月卅日午后二時半より中六番町の櫻井女學校にて文學會あり式の順序は、

○唱歌○祈禱○聖書朗讀○賛美歌○英文感化の說(小河)○音樂(高野)○邦文(奥)○同上(岩上)○音樂(ノルカート、飄山)○英文忍耐の說(矢島)○同上(一柳)○音樂(小野)○邦文(北見)○唱歌○邦文(奥野)○音樂(長谷川)○英文熱心之說(飄山)○唱歌○英文旅行說(小野)○唱歌○英文東西の文明(栗塚)○音樂(ノルカート、飄山)○英文修學の說(長谷川)○音樂(飄山)○英文カンベンセーションス(神田)○邦文(緖口)

右の如くにて何れも皆な令孃若くは夫人なり斯て小學數學科卒業生六人に英學普通科　人に卒業證書を授與せられ式全く畢りたるのち別室にて小宴の馳走あり來客凡そ一百人ありたり。

○東京女子傳道女學校　去月三十一日午后二時より築地の同校にて第一回卒業生(四年學科を經て)四人あり式の順序は、

○讃美○祈禱(タムソン)○唱歌○聖書暗誦(啓蒙學校、男生徒凡六十人)○唱歌(同上學校女生徒凡三十七人)○唱歌○聖書朗讀(和田秀豐)○讃歌○祈禱(服部綾雄)○說教(田村直臣○マリア、マルタの事)○唱歌○演說(ワデル。卒業生への勸告)○唱歌

右の如くにて後ち今井みね、松本せん、森田ちゑ、竹中まつ、の四子へ卒業證書を授與さる來會するもの凡そ三百人ありき。

○成立學舍女子部　其第一紀年會を去一日午后二時より執行さる式塲を校庭に設け順序大畧左の如くなりき、

○唱歌○報告(中原)○胡弓(藤川いせ)○箏合奏(四屋、竹井、横山)○祝辭(鈴木弘恭)○英文朗唱(津久井へる)(小原なほ)○祝辭(戸澤わか)(小出てい)○演說(瓜生寅)○耐忍(竹井、吉田)○祝歌○演說(イーストレーキ)○箏(高野、槻、町田)○英話對唱(寺西、山岡、恒川)○演說(穗積陳重)○箏(出石)○唱歌○英文朗唱(關、神戸)○同上(岩村都)○演說(中村正直代)○箏(高野、町田)○英文(小山、萩原)○演說(土子金四郎)○箏(高野、町田)○唱歌○長笛三絃(瓜生高野)

右畢て后ち立食の饗應あり來客二百四五十名ありたるよしに見受けたり。

○大日本婦人衞生會　本日午後一時より神田一ツ橋外大學講義室に於て同會を開かるゝなり。

○吳港婦人談話會　安藝國吳港にて大江順子檜垣儷子の二氏發起となり婦人の智識を廣ろめ品德を養ふの目的を以て同會を設立し去二月第一日曜日に其第一會を開らき爾後每月第一第四の日曜日に開會することし家事整理法、夫妻の關係、姑舅に事ふるの心得、育兒の法、親戚朋友等に接する心得、婢僕に對する心得、交際動作の道、衞生上の心得、其他一家の責任を負擔するに切要なる學藝の演說談話をなして實際に進むことを期するものなりと因みに發起大江順子は佛徒中有名なる大洲鐵然氏の息女にて同港正圓寺住職大江俊泰に嫁し名望あり檜垣儷子は小學教員の職にある人なりと。

○平田織江刀自　刀自は夙に皇學を以て雷名を轟ろかされし故平田篤胤翁の一女にして家學を受け繼ぎ文道にも熟達し能書を以て名あり嘗つて數巻の書籍をも物せられたる人なるが去廿一日享年八十一歳を一期とし溘然長逝したる由刀自は鐵胤君に配し文藝の道に通せられし人るながさりとは最と惜しむべきことにこそと秋田新報に見へたり。

○防長婦人相愛會　慈惠博愛の道を講じ兼て婦人の智德を進むる以て目的とし題號の如き會を都濃郡德山村私立白蓮女學校內へ設ふけられたり。

○前橋產婆學校　上州前橋の醫師小原澤錠三郎氏は同地へ產婆學校を設けんとて奔走中の由同氏はもと東京產婆學校に教授せられし人なりと。

○京都婦人共勵會　去月廿四日同會を開かれ來會婦人百五十餘名あり看病婦學校教師リチヤルド氏と藤田愛二氏の演說ありたる由なり。

○女況彙報　山形には英語女學校を設ふくることになりて本月末に新築に取掛ると云ふ○名古屋にても女學校設立の計畫ありて先頃勝間田知事上京の節府下二三女學校を參看したり○藤岡婦人會は去月廿四日其第二十四回を開きたり○高松婦人談話會の第二回を去月十八日淨願寺にて開きたり○松山婦人會愛媛婦人交際會婦人慈善會等は合併の相談中なり○信州小諸にて婦人會設立の計畫あり。

○版權書目　三月中官報に掲げありし版權登錄書籍の中女學に關する者左の通

めしたき改良法　一枚　兵庫　岡田平治
清風雅唱　一帖　東京　友田文子

○子供のはなし

尤も尊とき所行　(其二)

兄の申すようは今年二十五には成ますれど未だ仰せの如き尊とむべき事とては一つも致したることなし只だ何卒萬事を棄てゝ其樣ある事が致したいとのみ日夜に望み居りまする計りで

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

別にお話し致すものも御座りませんと云ふ、老人重ねて問ふらくよし〳〵一つも尊とむべき事を致さゞりしと云ふか然し此迄爲したるうちにて何如なるとか一番に心に喜ばしう覺へたると云ふに、左ん候それは或る日の夕暮馬に乘つて彼處の道を歸りまするとき馬が急に驚ろいて足を止めましたゆへ靜かに下りて何物や居ると吟味しますれば曾て私を大勢の中で惡口嘲弄したのみか其後私を見付次第必らず打切つて棄てんなど申し居る某と云へるもの酒に醉ふて昏睡し道の傍はらの岩の上に睡り居ります若し最少し身を動かさば乍ち數千丈の谷へ落ちませうところ私は先づ近づいて之を抱きしめ靜かに搖り覺まして眞に危うかりし若し私に怨みあらば何時にても尋常に勝負いたすべし今日は酒にも醉はるゝ樣子他日重ねて相見んと申して別れましたが其後彼れは復た私を附けねらはぬよし抑も初め何故に私を怨みましたかは知らねど其の怨みが散じたとの事は何よりも喜ばしひとてこれが今迄の中にて第一の喜びでありまするとと答へました。老人は大に之を賛め汝ぢが怨みに報ゆるに恩を以てし之を助けたとは既に尊とき所行であるに之をば左程には喜ばず先づ彼の思ひ違への晴れたるを喜ぶと倚更らに尊とき事なり然るに此の尊とき所行をば倚ほ足れりとせず未だ心に尊としと思へるほどの事を爲したる覺へなしと云ふはいよ〳〵以て賞すべき所存なり之れこそ三人の處行のうちにて第一番の尊とむべき所行なりとて乃はち彼の重寶の刀を與へける。

○盜人と狐　　札幌　大島千代子

或る人馬を木につなぎてしばらく他へ行きしに盜人ありそうかゞひて出來たり馬をぬすみて林の中にかくしおきそしらぬかほして居りしに持主かへりて馬の行衞を尋ねければ盜人「ろの馬よ今其馬の木に喰はるゝを見たり」と答へけるにあにとて去る事との有るべきとて持主なか〳〵うけがはず盜人もいひつのりてあらそひはつべくもあらざれは終につれだちて狐の許に至り其裁判をこへり狐はぬからず夕べは海の水もえあがり枯草をなげいれてとう〳〵消しとめ今日はつかれて心もにぶければ明日來るべしといひければ盜人聲をあげ何如で海のもゆべきいかで枯草の火をけしうべきそらごとにもほどの有るものかあとておほひに笑へり狐もすかさずいかで木の馬を食らうべきいつはりも物によるかあとわざけり答へければ盜人もおのが言葉の理あきをさとりついに馬をもち主にかへしけるとぞ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第九十七號に批評あり

宮内省御藏板

婦女鑑　全六冊

此書ハ宮内省ノ御藏板ニシテ婦人ノ亀鑑トナルベキ和漢洋ノ孝女烈婦貞女賢母等ノ言行事蹟ヲ蒐輯シ且ツ圖画ヲ挿入セラレシモノニテ既ニ本年一月
皇后宮ヨリ華族女學校ノ生徒ヘ御下賜相成リ實ニ婦人ノ課讀又ハ修身口授用書トシテ其徳性ヲ涵養スルニ於テ最モ有益ノ書ナリ今般弊舗ニ於テ發賣ノ御許可ヲ蒙リ候ニ付婦人ハ勿論苟モ婦女教育ニ志アル諸彦ハ必讀アランコトヲ切望スル所ナリ

但シ右書ハ各貴捌ヘ差出シ有之候間何卒御手寄之書林ニテ御講求被下度候

東京書林　吉川半七恭白

定價金壹圓　郵送料金四拾錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

●結婚媒妁所　東京日本橋區檜物町一番地河岸角
全國何人に限らず嫁聟養子共媒妁依賴に應ず御來談を乞ふ

交詢案內

●雇ひたき方（甲）

一　機織　府下にて十二三より以上の女を數百人機織に雇ひたし（神田紺屋町十一番地福原方）

二　學婢　十七歳以上にして小學校卒業同等の學力あるものにして三ヶ年入塾して差支なきもの試驗の上雇ひたき學校あり

三　家婢　十五六歳のもの小間遣に雇たきものあり尤も毎日外國女教師に附け一時間宛英語を學ばすとのこと

四　家婢　十六歳より二十歳位の間にて柔順なるものを雇ひたきものあり餘暇を以て讀書算術習字裁縫等を教ゆと云ふ

五　家婢　年齢廿才位身元慥にして正直に臺所を能く働らくもの一人一圓五十錢位の月給にて雇たきものあり

六　乳母　乳母とは云へ乳を要するにあらず基督教主義にて小兒を養育し得るもの月給は食料の外二圓位にて雇ひたし主人は醫學生家族八人內下婢二人家事に頓着するに及ばずと

●雇はれたき方（乙）

七　裁縫　年齢廿三にして家內の手助とならんが爲內職に裁縫に雇はれたき者あり華族樣か町家ならば大家のかたき內にて築地邊ならば通ひてもよろしとのこと其他ハンケチーフのふち縫ひの如きにても宜しくもよろし

八　教師　地方女子師範學校卒業生にして教育に從事し居りしもの東京にて四五時間は教育をなし餘は自分の勉强時間と定め八圓より十圓までの中にて雇はれたきものあり尤も洋人の居る所ならば何處にてもよろし

●喜びのめぐみ

一　乙第五號は某女學校と相談まとまりたり

京橋區日吉町八番地
女學雜誌社

發兌				
四月。	七日	十四日	廿一日	廿八日
五月。	五日	十二日	十九日	廿六日
六月。	二日	九日	十六日	廿三日　三十日
七月。	七日	十四日	廿一日	廿八日

定價
一册。五錢　郵稅。一錢（但府內無郵稅）
十册。四十八錢郵稅。十錢（同前）
半年分　一圓十七錢　府外は　一圓四十三錢
一年分　二圓卅四錢　府外は　二圓八十六錢

廣告
特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む
一行　一回　前金拾錢　（廿七字詰）
同　三回以上　一割引
同　六回以上　二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學に關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.
"JOGAKU ZASSHI."
Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.
Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

明治廿一年三月十二日
版權登錄
自第百二號
至第百十一號　拾册

明治二十一年四月五日印刷
明治二十一年四月七日出版

發行所　東京京橋區日吉町八番地　女學雜誌社
編輯兼發行人　東京京橋區日吉町八番地寄留　巖本善治
印刷　東京下谷區仲徒町三丁目七十一番地　森田豐

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY